

提言

「出逢いに導かれて」



きずな編集員

山下 直子 さん

「きずな」のそれぞれの教材には、そこに登場する子どもたちや親御さんの思いがたくさん込められています。それを是非、皆さんに知っていただきたいと思ひながら編集したのですが、なかなかすべて伝えることはできておりませんし、「手引書」にも書かせていただきましたが、それでも語り尽くせない思いがたくさんあります。

低学年に「ひいばあちゃん、わたしのじまんです」という教材があります。これは一年生の時から聞き取りを始めて、二年生になった時の子どもの作文です。主人公のあちゃん、文字の読み書きがとっても苦手ですが、面白くて、学びたい意欲がある子でした。

一年生の夏休みに「うちの人の仕事を調べよう」という宿題を出しました。家庭にも連絡し、協力していただけるところは取材に伺いますということで、あちゃんのお母さんが経営しておられる肉屋さんに行きまし

た。お母さんから話を伺っていた時に、「いやあ私の苦勞に比べたら、うちのばあちゃんはいくらも苦勞しとらす」と言われたので、「じゃあ、おばあちゃんに」ということで、その場で一緒にあちゃんにも話を聞きました。おばあちゃん、今の時代にそんな苦勞があるんだ」という経験をされていました。私もびっくりして、「おばあちゃんす」かです」と言ったら、

「うちのひいばあちゃんに比べたら、私の苦勞なんか何でんか」と言われました。「ひいおばあちゃんてどんな苦勞されたんですか？」と訊くと、「ひいおばあちゃん、小学校にろくに行けなかつたから、文字の読み書き

がほとんどできなかった。五年生の時には、年30円という契約で農家に子守奉公に出されて、お正月しか帰れない。朝早くから夜9時まで赤ちゃんを背負った生活をしないといけない。夏はおしつこであせもができ、冬はしもやけになる。また、文字が読めないことで病院に行っても、バスや電車に乗るのも大変な苦勞をされる。しかし、60歳の時に車の免許を取るために、自分で文字を獲得しようと努力されて、半年かかって3回目の試験で合格される」という話をばあちゃんから伺いました。

一方、私は話を聞いているうちに、「この話知っている。昔大学の部落問題で聞いたことがある」とフラッシュバックしたんです。お名前も覚えていたので確認すると「そうよ」と言われました。私がひいばあちゃんに会いに行くと、「先生、私の話を聞いてくれたとね」と言っ

て、ひいばあちゃんと抱き合いました。何という巡り合わせだろう、私が教員になる直前に話を聞いて、道を照らしてくれた方の曾孫さんを担任して、その話にもう一回戻ることができた。何という素敵な、「同和」教育の出会いの素晴らしさを実感しました。

あちゃんに是非、このことをしっかりとつめて、受け止めて欲しいと思つたんです。でも、あちゃんはひいおばあちゃんの話とか全く聞いたことがなくて、その時初めて「へえ、おばあちゃん、……ひいおばあちゃん、……」という感じで聞いていました。当時、あ

ちゃんは一年生でしたが、ひいおばあちゃんに聞き取りをしました。「ひいおばあちゃん、五年生の時、子守をしていたそうなんです。赤ちゃんのおしつこであせもができた、しもやけになったそうです」と書いています。でも、文字の読み書きがとっても苦手なあちゃんが、この時と

ばかりにすごく一生懸命に書いてたんです。そして、「初めて知った」あちゃんが絵を描いたんです。絵はひいおばあちゃんに「どきどき格好をしたった？どきどき風の子どもばからった？」と話を訊きながら、この時に描いた絵です。二年生になって、またあちゃんは聞き取りをしました。この年の3月に解放子ども会の子どもたちが、地元解放文化祭の中で、あちゃんのひいおばあちゃんが頑張っていたことを劇にしてみました。あ

ちゃんは、今まで話でしか聴いていなかったひいおばあちゃん姿をビジュアルとして観るわけなんです。「あつ、こういうことだったんだ」というのをあちゃん、自分の中に強く印象づけられて、「ひいおばあちゃん、つてすごい」と言うようになっていきました。そんな思いもあって二年生の夏休みに、さらに熱を入れて聞き取ることができ、その話を紙芝居にしてみました。「き

(13頁に続く)

〔14ページ〕提言〔続き〕

ずな」に載っているんですが、一年生の頃だけ学校に行けて、カタカナの勉強だけしたという絵もひいばあちゃんに尋ねながら完成させました。また、一年生の最初までは学校に行けたんだけど、学校に赤ちゃんを背負って行くと、いじめっ子がさんざん文句を言うんです。聞き取ったことを絵に描いていくときにあんちゃんが、「ひいばあちゃんの顔をどっちば向かせようか」と訊いたんです。ひいばあちゃんは、「いじめっ子が言うのを聞こえないふりをして無視してやった。そぎゃんとは気にしとらん」という風に振る舞った」と言ったから、じゃあ、いじめっ子の方は向いていない方が良さねって、それを考えながら描いたことでもう一回ひいばあちゃんの意地・誇りを自分なりに感じ取ってきたんです。その後の子守奉公のシーンは1年生の時に描いていた絵があるからこれをそのまま使いました。次にひいばあちゃんが勉強して免許を取っていくという場面です。この4枚の紙芝居を作ったんです。もう一つ版画の作品があるんですが、2年生の時に載っています。2年生の時にあんちゃんはひいばあちゃんのことをみんなに紹介したいと言って、版画を作ったんですね。

途中にこの版画を挿入して、紙芝居を完成させました。その頃に教科書無償の授業もやっていたので、子守をして学校に行けない男の子の姿と自分のひいばあちゃんの姿が重なって、あんちゃんは手を挙げて、「これすごく悔しかったと思います。これうちのひいばあちゃんと同じです」と発言もしていきます。あんなひいばあちゃんのことを知ったことで、そして聞き取りを重ねていったことでひいばあちゃんの生き方を誇りに感じていきました。紙芝居を学年で発表した後にあんちゃんは、「うれしかった。だって、ひいばあちゃんはすごいってみんな言ってくれたもん。ひいばあちゃん、あんちゃんのじまんだもん」と言ったんですね。こうやって自分に身近な人の姿を表現していくことで、自分の中にそれが確かなものになっていく、それを周りの人が認めてくれたり感動することが力になっていくんだということを感じることができた出来事です。

出会ったたくさんの子どもたちはそれぞれの背景があり、そこにあたたかいかけがえのないつながりができていきます。それは、本当にいつまでたっても切れることのない、あたたかいつながりです。そういうものを紡ぎ出していくのが、この「き

ずな」なんだと思っています。

「きずな」2020年度改訂版
小学校1・2・3年用
「ひいばあちゃんは、わたしのじまんです」より

